

## 「マコム (makom/場)」概念の考察に基づくダニ・カラヴァン作《人権の道》解釈の試み

早坂 若子 (慶應義塾大学)

---

本発表では、イスラエル出身の現代彫刻家ダニ・カラヴァン (Dani Karavan, 1930-2021) がドイツ、ニュルンベルク市に制作した《人権の道》(1989-1993) を対象とし、カラヴァン特有の「場」理解である「マコム (makom/場)」概念の考察を踏まえ、その作品解釈を試みる。

ダニ・カラヴァンは、作品の「形と素材は、その場が要請する」と主張し、20世紀後半以降、世界各地に立体造形作品を制作してきた。そのような作家を、先行研究は「サイト・スペシフィック・アート」の先駆者として位置づけてきた。しかし、この文脈でカラヴァンを検討する先行研究には、カラヴァンの造形を、作品が設置される場所に特有な歴史的意味性に安易に結びつけて解釈する傾向が否めない。その一つの好例が《人権の道》である。ナチス党大会が開催され、またニュルンベルク法が制定された都市、ニュルンベルク市の旧市街地に設置された《人権の道》は、列柱、檜の樹、門で構成され、列柱一本一本には世界人権宣言の全30条文が30の言語で彫られている。そのような当該作品について、ユレ・ロイターはファシズム的造形様式との一致を指摘し、また、ドイツ現代史研究では、同市によるナチス・ドイツからの克服を体現する事例として名指しされる。

こうした見解の陰で見落とされてきたのが、《人権の道》オープニングセレモニー (1993年) での作家自身の発言である。「これはホロコーストの追憶の場ではない、記念碑でもない。人間が通り抜ける道である」の真意を考慮するならば、作品が設置された「場」と造形の連関にあらためて着目し、《人権の道》の再解釈を試みる意義は少なくない。

そのために発表者が重視するのが、英語の「サイト (site)」よりも広い意味を持つヘブライ語の「マコム (makom/場)」である。「マコム」は物理的な場のみならず、その歴史的、文化的背景に由来する情緒的な「現在 (presence)」をも含意する概念である。「マコム」とカラヴァンの芸術制作との密接な関係性は、シオニズム運動の下、1948年にカラヴァン自ら創設し、1955年まで生活を営んだ共同体「キブツ」での芸術制作にまで遡って検討することができる。重要なのは、「マコム」概念が「場」へ積極的に関与する人間存在を本質的に含意する点である。本発表では、これまで十分な検討の機会に恵まれてこなかったこの点に留意し、一次資料であるゲルマン国立博物館アーカイブで入手した当該作品に関連する資料類、および発表者がカラヴァン本人に行ったインタビュー

(2019年)から得た知見を精査することで、《人権の道》の造形的源である「場」には、当該作品に隣接する建築物、ニュルンベルク市の旧市街地という都市空間に加え、そこを歩く人間の存在が意図されていたという解釈を提示する。